

日本配備開始のF35B戦闘機

F35Bステルス戦闘機の総額（42機、30年運用）



米国製のF35Bステルス戦闘機3機が7日、航空自衛隊新田原基地（宮崎県新富町）に到着しました。同機の機体単価は222億円（2025年度予算）で、現在の主力戦闘機F15（約100億円）の2倍以上。自衛隊史上最も高価な戦闘機です。それ以上に高額なのが修理や改修、燃料などにかかる運用・維持費で、30年間運用した場合の総額（ライフサイクルコスト＝LCC）は1機あたり856億円。1回飛ぶだけで1000万円以上かかる見通しです。

運用・維持に1機856億円

1回飛ぶだけで1000万円

防衛省は、①通常の離着陸を行うF35A105機②短距離離陸・垂直着陸（STOVL）が可能なF35B42機―合計147機を導入する計画です。防衛装備庁が4月に公表した資料によれば、147機を30年運用した場合、総額は約9・2兆円という途方もない金額になります。

このうち、F35Aの総額は5兆6087億円。単純計算で1機あたり534億円になります。ところがF35Bは3兆5933億円、1機あたり856億円。F35Aの1・6倍に上ります。その7割以上が運用・維持費です。F35Bの寿命は1機あたり8000飛行時間を目安としており、1回の飛行に1000万円以上かかる計算です。

さらに、米国防総省は機体を動かすソフトウェアの更新を頻繁に行っており、そのたびに機体単価や改修費用が高騰。軍事費増を引き起こし、国民の税金が米軍需企業に永続的に吸い取られる仕組みです。

加えて、F35Bは「いずも」型護衛艦を「空母」化して搭載する計画ですが、そのための甲板の改修費がかかります。ミサイルなど搭載する兵器も1発あたり数億円と高価です。



新田原基地（宮崎県新富町）に配備されたF35Bステルス戦闘機（右）。左奥がF15戦闘機。7日